

混在する日本

05L053 大竹麻由子

はじめに

「コミュニケーションを異文化理解の観点から考察する。国際化の時代を生きるための知恵と知性を磨く。」というのが、ゼミに掲げられていたコンセプトである。始めのうちは、専門的でマニアックな分野とばかり思っていたが、しばらくしてからそうではないことを知った。この分野に関心を深めていくことはむしろ、自分を取り巻く身近な世界の出来事に繋がるらしい。一つのテーマに取り組むことにより、他分野への興味が広がり、一つの事象は単独では存在しないことを知った。

勉強すると自分が変わるらしい。私自身変化したことと言えば、人間一人一人に対して以前よりも尊敬の念を抱くようになったことだ。人間が世の中を構成している限り、この世界はこのままで良いのではないか、と思うのである。

外国人化する日本人

日本はこれまで数々の欧米の文化を取り入れてきた。現在の日本はとりわけアメリカの社会環境や思想に、仕組みや発想が似てきている。アメリカの文化は私たちの生き方に根付き始め、日本の今後を左右するに至っている。生き方に根付くというのは、アメリカ的な文化や思想が、生きるための基盤として身体に取り込まれるということである。欧米文化を推進した人々の中に福沢諭吉がいるが、彼は日本人と西洋人の間に隔たりを見つけ、自分たちに足りないものや、見習うべきものを意識しながら取り込んでいった。

一方、現代の私たちは何が日本の思想であるとか、何がアメリカ的思想であるかを分からないまま生きている。というか、そもそもそんな分け方があることを知らないし意識もしない。そして欧米文化を輸入した先駆者である福沢たちと、彼らが作ったフィールドにいる私たちの間には、大きな違いがある。前者が欧米人に近づこうとする日本人であったのに対し、後者は自分たちの思考方法に欧米的要素が含まれていることを知らない日本人である。真の意味でアメリカ的思考を身体に取り込み、生き方に根付いているのは私たちの方である。

日本の思想とアメリカの思想。同じ空間に二つの異なる価値観が混在することは、しばしば混乱を引き起こす。例えば、協調性を重視する人間と、個人の自由を重視する人間がいる。年功序列は当然と考える人間と、能力のある者こそ上に立つべきだと考える人間がいる。これらの相反する人間が共存することは、その集団の足並みを乱す原因となる。近年のグローバル化の弊害とは、日本人の集団の中にも関わらず、それぞれが外国人と接している感覚を持つようなものである。

洋画やアメリカドラマをみているとき、誰もが違和感をもった事があると思う。その違和感が何であるかはわからないが、とにかく画面内で動く外国人の感情や行動、思考などが同じ人間であるにも関わらず理解できないのである。それは、主人公の怒りや喜ぶシーンで共感できないというものではなく、それらの感情を抱いた理由や経緯に対して共感できないというものである。しかし自分とは異なる人間だとわかっているため、特に気にも留めずに見過ごすことができる。

これは実際にアメリカ人を目の前にしたコミュニケーションの場合にも言えることではないか。自分のコミュニケーションの想定範囲を超える振る舞いをされても、既に「自分とは違う人間」だと割り切れているため、相手の人間性を疑うことはあまりない。これは、うまくコミュニケーションが出来ているのではな

く、通じ合うことのレベルに妥協しているのだ。これがアメリカ人ではなくアメリカ的思想をもった日本人だったらどうだろう。そのような人間を実際には理解することができないにも関わらず、同じ日本人ということから通じ合えると思ひ込んでしまう。しかし通じ合おうとすればするほど、不信感が増大することに繋がる。

アメリカ的思想をもった日本人はいかにして出来上がるのか。それはアメリカ文化を取り込もうと意識している人々ではなく、その次の世代に出来上がる。福沢諭吉のような欧米文化を「輸入する人」と、輸入した人々が作った「フィールドにいる人」とでは文化に違いが出る。アメリカ社会の利点を日本にも導入しようとする人は、次世代にその利点に染まった人間を作ろうとする。ところが、これは自ら住みにくいと感ずるような社会を作ってしまうことに繋がる。いくら新しい考えを推奨していようとも、新しい考えに根っから染まっていない人間は、どうしても根っから染まっている人間に不信感を持つだろう。

例えばアメリカ的思想の核である「個人の自由」を、当人は持ち得ていないが、推奨すべき思想だと考える人がいる。彼はそれを次世代への教訓とするが、次世代の人間が「個人の自由」を我がもの顔で行使するようになると、両者の間には隔たりのある思想を持った関係が出来上がる。推奨した人々は「個人の自由」という価値観を根底に持っていないため、新しい考えを持つ人々の行動を理解できない。というのは、頭の中の発想だけでは、それによって生じる複雑な影響にまで考えが及ばず、実際にその考えが浸透したとき予期せぬ現象が生じてくるためだ。そのため、ある価値観を推奨する人間にとって、その価値観が根付いた人間の行動を予測することや律すること、更には共感することを困難とする。互いに理解し合えない関係はグローバル化のスピードに比例して不断に続いていくのだ。

以上に述べたことは日本社会を脅かす状態に見える。しかし視点を変え、俯瞰視すれば問題が問題ではなく、むしろ良い方向に進んでいるという見方も可能である。

そもそも、価値観のタイムラグは遥か昔から続いてきた。それが最近の若者批判である。若者を批判する人は相対的に年上であり、年下の人間を条件反射的に批判対象にする。そして価値観のタイムラグによる結果を「問題視」してしまうのが年上である。それは、年齢が上がれば上がるほど守りの態勢に入っているからである。彼らにとっての年下とは脅威を感じる存在なのである。年下の文化や特有のルールというのは、自分たちの生きてきた価値観から外れるものである。年下によって作られた価値観が広まることや、それによって社会が機能し始めることは、彼らがこれまで築き上げてきた価値観を消すか塗り替えなければならぬ。これはアイデンティティの喪失と同じであり、彼らにとっては生き辛いことになる。人間は自己を確立してこそ生きていられるからだ。

自己を認識するにあたり、その人の人間関係や社会での役割、経験というものは必要不可欠なものであるため、それが脅かされては自分が何者であるかわからなくなる。逆に言うと、考え、行動することは自己が確立している証拠である。ある人の一貫性が損なわれることは、長く生きれば生きるほど衝撃が大きい。その不満と不安が若者批判に繋がるのではないか。年下はというと、新しいことを積極的に取り入れていく人間である。若い人間は勢いがあり、斬新で柔軟な考えができる。自分が何者であるかを考え、自己を確立し、それを壊し、また探る。このような動的な状態が若い人間である。彼らも生きることに積極的なのだ。どちらの人間が欠けてもその社会は機能しない。

現状維持が必要なところもあれば変革すべきところもあるだろう。勢い余って激突する人間を止める役割は必要だし、停滞状態を動かす役割も必要である。人々がそれぞれ生きるためにしていることは、混沌としているように見えて、実はそれがバランスを保っている状態なのである。日本社会に広まるアメリカ的思想も、日本の発展の一部に位置づけてよいのではないか。これは、異文化が入ってくることがその文化の発展に繋がるという意味である。

混在してきた日本

司馬遼太郎氏が文明は普遍的なものだと言っていた。普遍的なものとは、他民族がそれを利用したり身につけたりするもので、他民族に利用され得ない文明は文明ではないそうだ⁽¹⁾。自分が持ち得ない何かを発見した人は、それを模倣し、使いこなし、今まで自分が持っていた何かと統合させる。その「何か」は発見される前と、統合された後では形が異なる。思想でも知的文化でも道具でも、こうして進化を続けてきたはずだ。こうした別々のものを繋げることは、新たなものを生み、大きな現象に繋がる。

日本がこれまでに発展を成しえたのは、それぞれ違う「何か」が混在し続けてきたためである。それはヒトを構成するところから始まる。そもそも日本人は単一民族ではない。福岡伸一氏の『できそこないの男たち』⁽²⁾によると、日本人は多数の民族からなる混血人種であることが分かる。

日本列島には、最初に朝鮮半島やカムチャツカ半島から旧石器人が来た。その後縄文時代の主要なメンバーが朝鮮半島を経由して南から入ってくる。日本人に最も多い遺伝子が、彼らの遺伝子であり、主にアイヌ、東北、沖縄の人々に色濃く残っている。彼らが日本列島に言語や固有性を与えた人物である。それから稲作と金属器をもった弥生人と呼ばれる渡来人が入ってくる。南琉球・八重山諸島で高頻度に、日本列島諸地域で中程度の人々に彼らの遺伝子が見出せる。また、チベット・モンゴル・満州・漢民族に弥生人と似た遺伝子を持つ人々がいる。彼らの遺伝子も日本人の十数から20%の頻度で見られる。このように、日本人は多種多様な民族からなる混血人種である。日本がこれまで発展を続けてこられたのは、まず人種の混在があったからだといえるのではないか。そして人種の混在には必ず交流がある。文明とは交流から生まれるため、交流があつてこそ進歩できるのだ。

加藤徹氏は『貝と羊の中国人』⁽³⁾の中で、中世においては西洋文明よりも東洋文明の方が進んでおり、近年は西欧文明の方が進んでいたと述べている。今日西欧文明が世界規模の文明国になれたのは、交流を絶やさなかったからである。中世、西欧文明が停滞した間も古代ギリシャの知的遺産はライバルであるイスラム文明やビザンチン文明が保存し、これが中世の末に西欧に伝わり、ルネサンスの原動力となった。近世以降も西欧では各国が順繰りに西欧文明の法燈を守り、進歩を絶やさなかった。ドイツが戦争で荒廃した後、フランスが学芸の中心となり、フランスが革命で混乱した後、イギリスが西欧文明のホスト国をした。イギリスが2度の世界大戦によって没落した後、西欧文明はアメリカに渡り今日に至った。一方、中国は外側にこのような競合協力国を持ち得なかった。ベトナムや朝鮮は協力国になるほどの力も人口もなく、唯一日本が協力国になった。しかしそれも江戸時代に入ってからであるため、西欧文明より遅れが生じたとは氏は指摘する。自国のみで文化を保存することは、壊れやすく変化に乏しいようだ。輸出入してこそ文明の発展を成しえるのだろう。

日本は、ヒト、文化、そして精神までも混在してきた。よく、日本人らしさとか国民性として日本人の特徴を表すことがあるが、その“日本人らしさ”にも、外国からの輸入によって出来た部分もある。先述の加藤氏の著書によると、今日の日本人らしさとは、中国文化を輸入してから出来たそうである。江戸時代、徳川幕府は儒教を官学とし、民間でも漢文の学習がブームになった。この時以来、日本人特有の文化・精神・倫理観が出来上がったそうだ。武士道といわれる彼らの精神もまた、元は徳川幕府が儒教によって武士の心得を育成した結果であるそうだ⁽⁴⁾。しかしそれより前から“禪”であるとか“義”という精神も存在していた。より古くからあったものは、新たな思想と混在し、模倣と改良を繰り返す。それにより生成されたものは、私たちが生きるなかで見出すことができるのだ。

おわりに

様々な価値観が広がるグローバル化において、世界が求めているのは同一の価値観ではない。世界の均質化は異質なものを求めた結果である。異質なものが広がり、それが均質化すれば、そこにまた異質なものが出現する。異質は変化の発祥地である。異質への抵抗と排斥が起こるのは、自分自身がそれを持っていないことを許せず、恐れているためだ。世界であれ人間であれ歴史であれ、この流れの中にいるのではないか。自分が何を求めているかわからないまま外部に向かい「何か」を発見する。その「何か」は咀嚼の過程で変化し、浸透した後とは別物になっている。それは外側の世界と相互関係にある。外部もまた私たちから「何か」を発見し、そこから「何か」を生み出す。それを見た私たちが、自分の中から新たな外部に出会うのだ。そして、導入から浸透に至る変化の最中に、私たちは最も悩み、苦勞するのであろう。大きく変わることは大変なことである。そこを進歩の代償として受け止めなくてはならない。そのような能力が人間には備わっているため、このままで良い、と私には思えるのである。

註

- (1) 「東北物語伝承館」(<http://www.kurikomanosato.jp/to-siba10-yayoi.htm>)
- (2) 福岡伸一『できそこないの男たち』光文社、2008年、217項。
- (3) 加藤徹『貝と羊の中国人』新潮社、2006年、217項。
- (4) 加藤、前掲書、122項。

参考文献

- ・加藤徹『貝と羊の中国人』新潮社、2006年。
- ・甲野善紀、内田樹『身体を通して時代を読む 武術的立場』バジリコ、2006年。
- ・司馬遼太郎『アメリカ素描』新潮社、1987年。
- ・福岡伸一『できそこないの男たち』光文社、2008年。
- ・福岡伸一『動的平衡』木楽舎、2009年。
- ・山口創『子供の「脳」は肌にある』光文社、2004年。
- ・養老孟司、内田樹『逆立ち日本論』新潮社、2007年。
- ・吉本隆明『真贋』講談社、2007年。
- ・山田佳苗「今から私はどう生きるか」『VERITAS』第12号、敬和学園大学、2005年。
- ・井上雄彦『バガボンド』講談社、1999年～。
- ・板垣恵介『グラップラー刃牙』秋田書店、1992年～。

(レポート指導教員 中村義実)